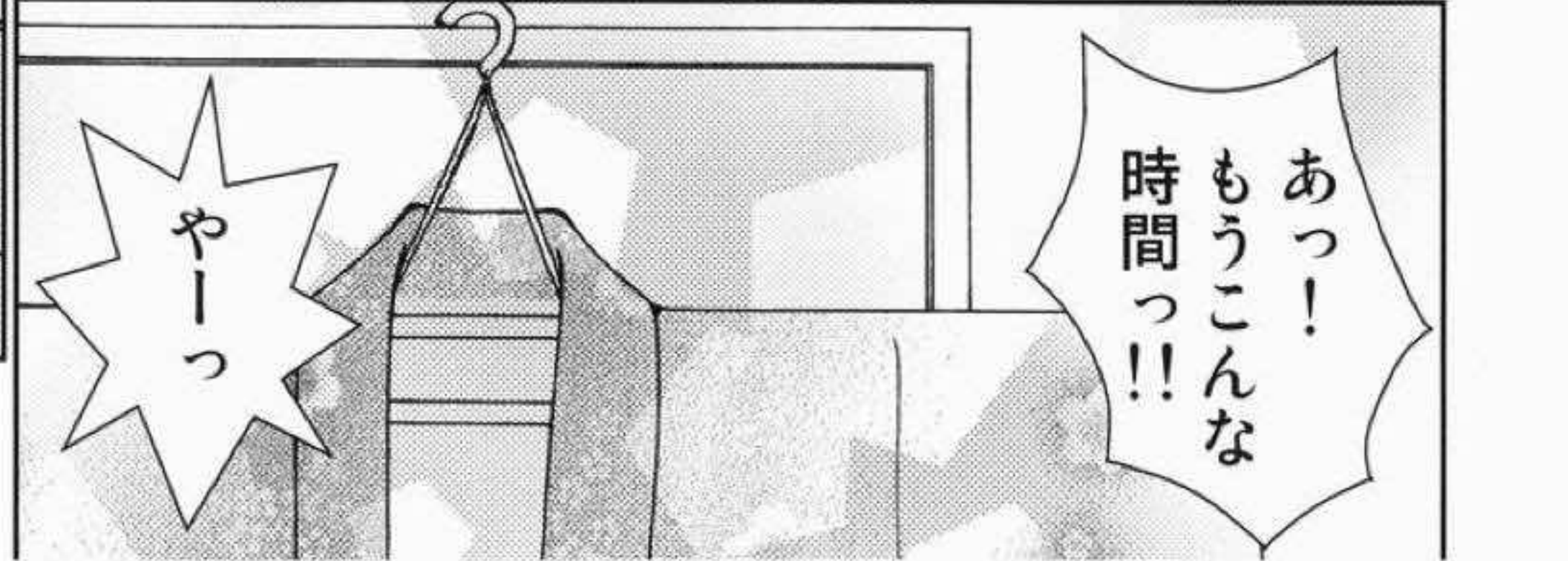
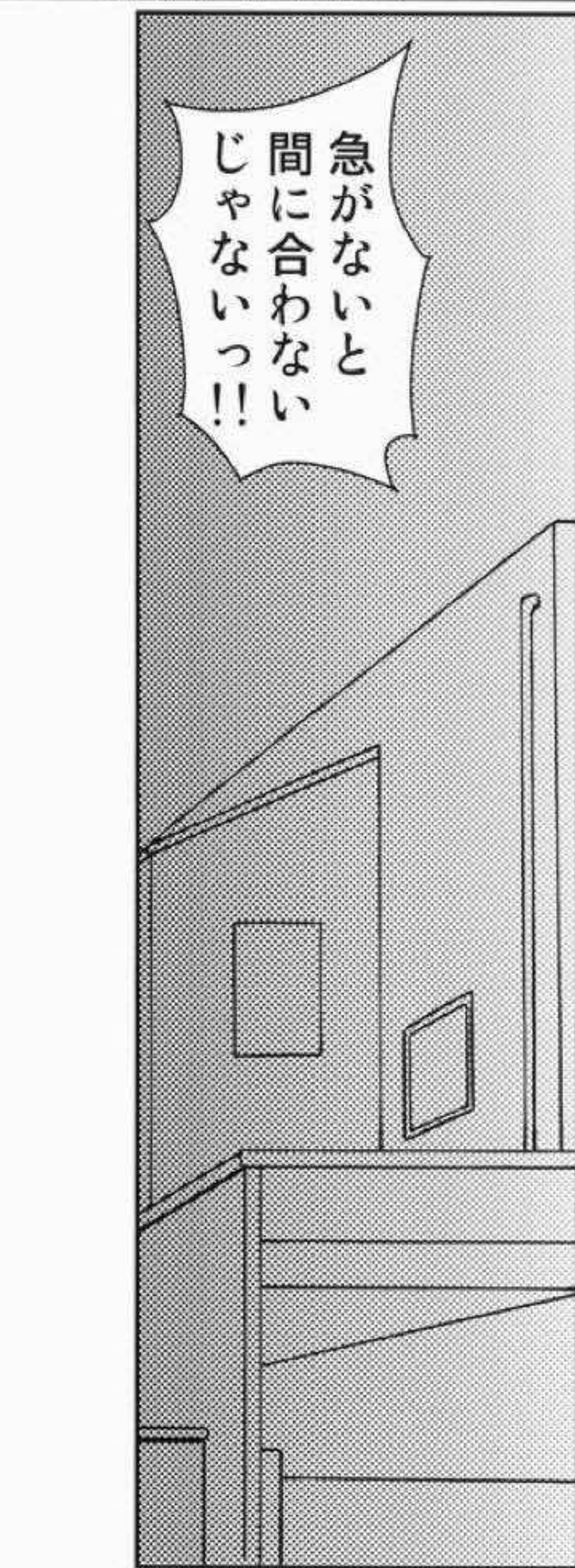


大丈夫っ!
ゆかただから!

FOR ADULT





◇こんにちは、はじめまして。りんご紅茶の2月かずおです。

◇今回の本、表紙だけ見ると「海辺で！」っぽいですが、
タイトル通りに浴衣です。

◇ヒナのオフ本もこれで9冊目なので、
そろそろまじめな話を作るはずだったのですが、
気がついたらいつも通りな感じですよ……。
ページは予定の倍くらいですけど！

◇それでは楽しんで頂けたら幸いです。

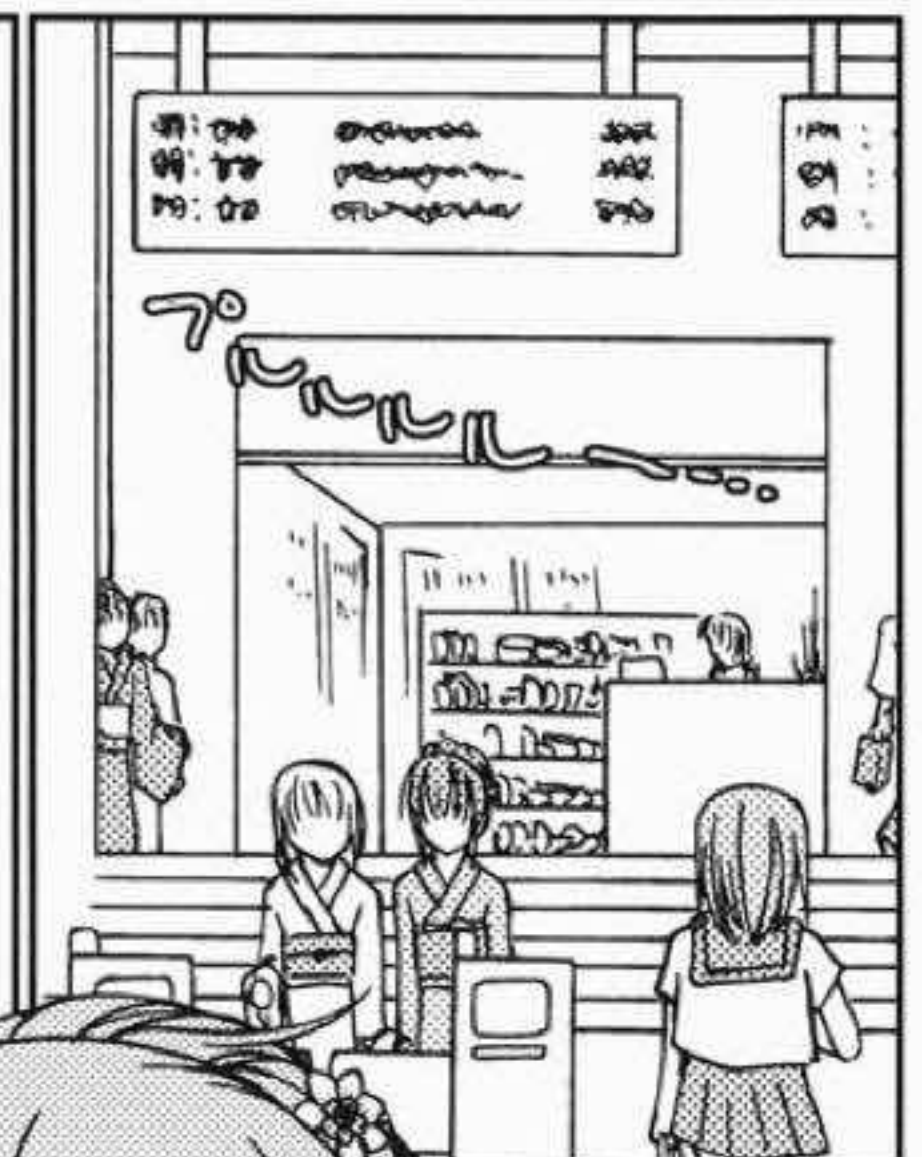


◇ 目 次 ◇

P 3～
「大丈夫っ！ゆかただから！」
2月かずお

P 24～
「夏祭り」
鷹宮沙玖羅

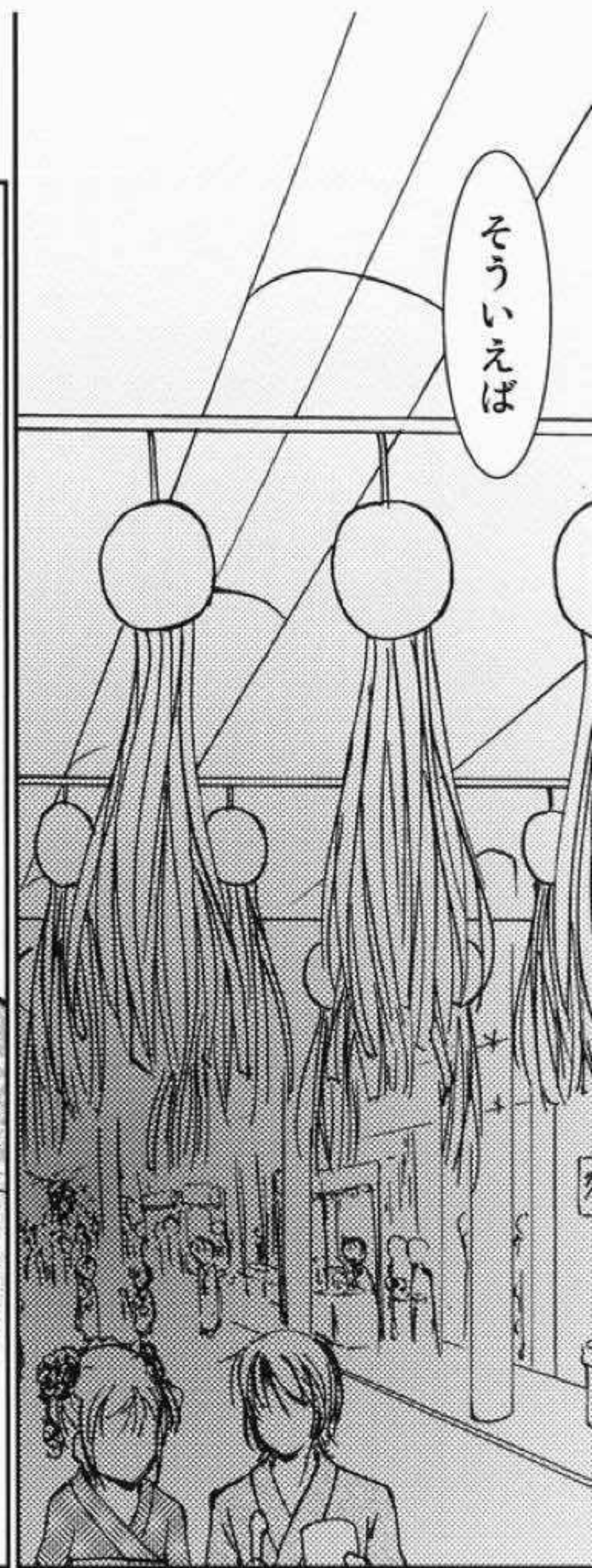
P 33
「よんこま！」
樫見 正央





ハヤテ君も
ゆかたを
着て来れば
よかったのに

あ——！……っ
僕ゆかた
持ってないん
ですよ……



そういえば



また
帰りの電車賃
貸すくらいなら
やめとく……



ゆかたレンタル



どうしてもと
言うなら
その辺りで
レンタルを……



……っ



おいしいですか
それ？

うん
好きなの



ガリッ



じゃあ
頂きます

ガリッ



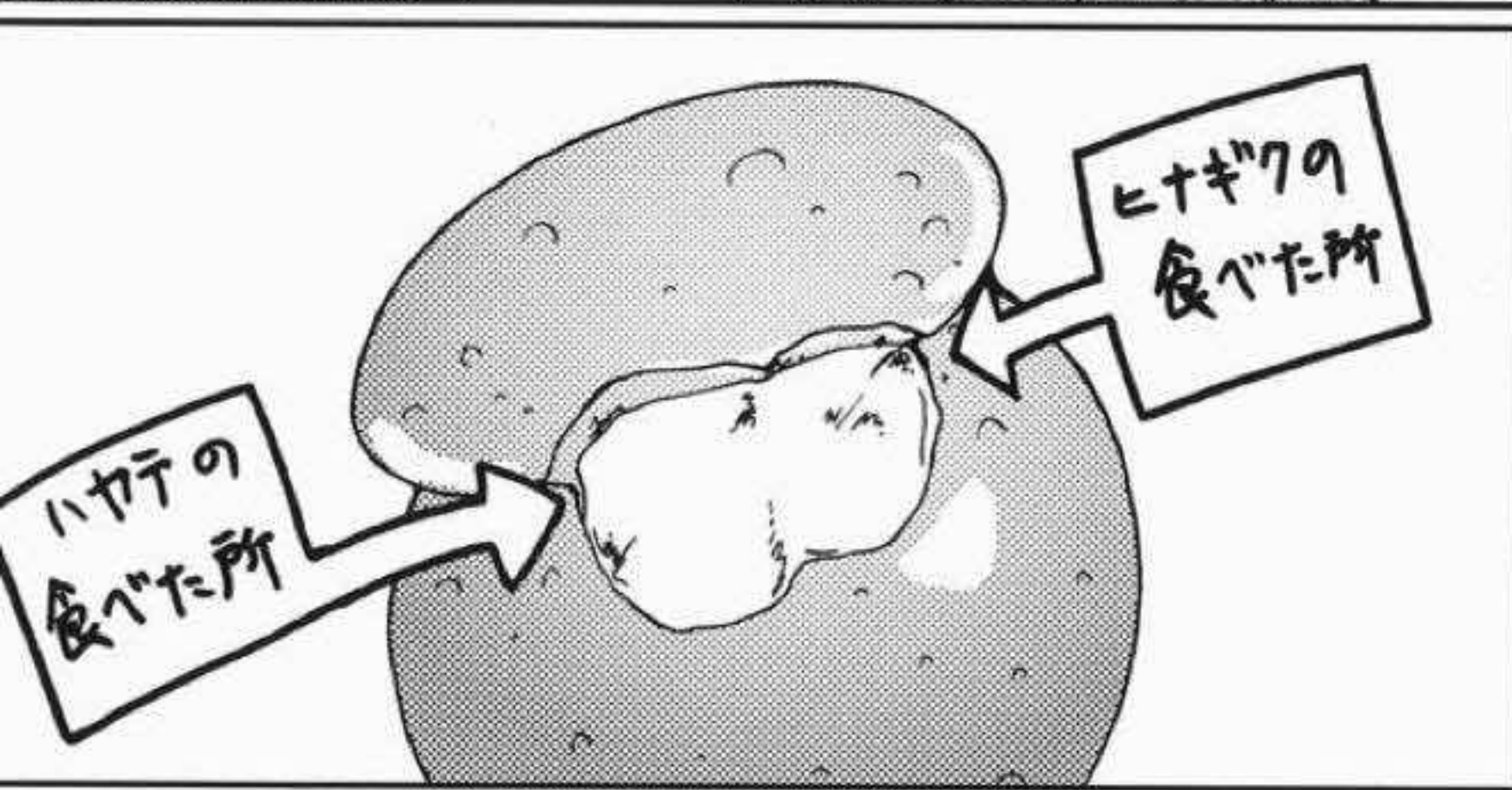
じ

...

初めて
食べましたけど
おいしいですね



ハヤテ君も
食べる？



ヒナギクの
食べた所

ハヤテの
食べた所



チョコバナナ 元祖ハニー

どうしました
ヒナギクさん？

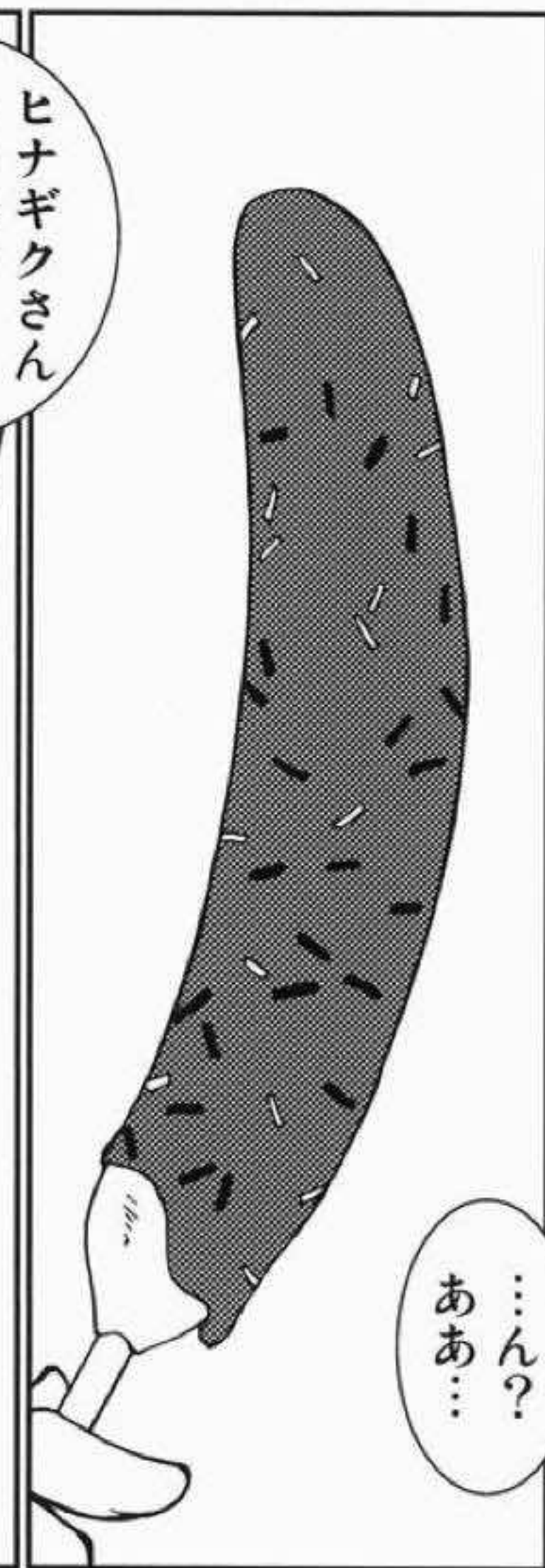
ふへ!?

えっ!?

な...何?
ハヤテ君!?









あれ?
ダメじゃ
ないですか

えっ!?

すっ

かああ

ゆかたの時
下着を
着ては



没収ですね

せっ

やっ

ちよっ!!

いきなり
何なのっ!?

イヤナリも
何も...

すっ

すっ

ヒナギクさんが
チョコバナナを
食べたので
言ったので



下のおクチに
食べさせて
あげようと
してるだけです

えっ？

かあああ

それに
何にコーフン
してたのか
知りませんが

やっ！

もう簡単に
丸飲みできそう
じゃないですか

あっ



おっ

んっ!!

おっおっ



ひあっ

ぐいっ

おろ

ハヤテ
くん……っ

ダメっ！

や……あっ！

おろ

おろ



あー…
もう一本あれば
後ろでも
食べれましたね

なあっ!?

!!

びく



おっと
ヒナギクさん
力入れたら
ダメですよ

あっ



そんなコト
言われても
身体が勝手に……

チョコバナナも
いいんですけど

やあっ



僕は
ヒナギクさんを
堪能させて
もらいます

ちよっ

はあ

はあ

あっ

びりっ

びりっ

びりっ

びりっ

びりっ

やあっ!!



ぐんぐん

びりっ

んあっ!!



その髪型も
可愛いんですけど
ヒナギクさんっぽく
ないですね

びりっ

びりっ

はあ?

びりっ



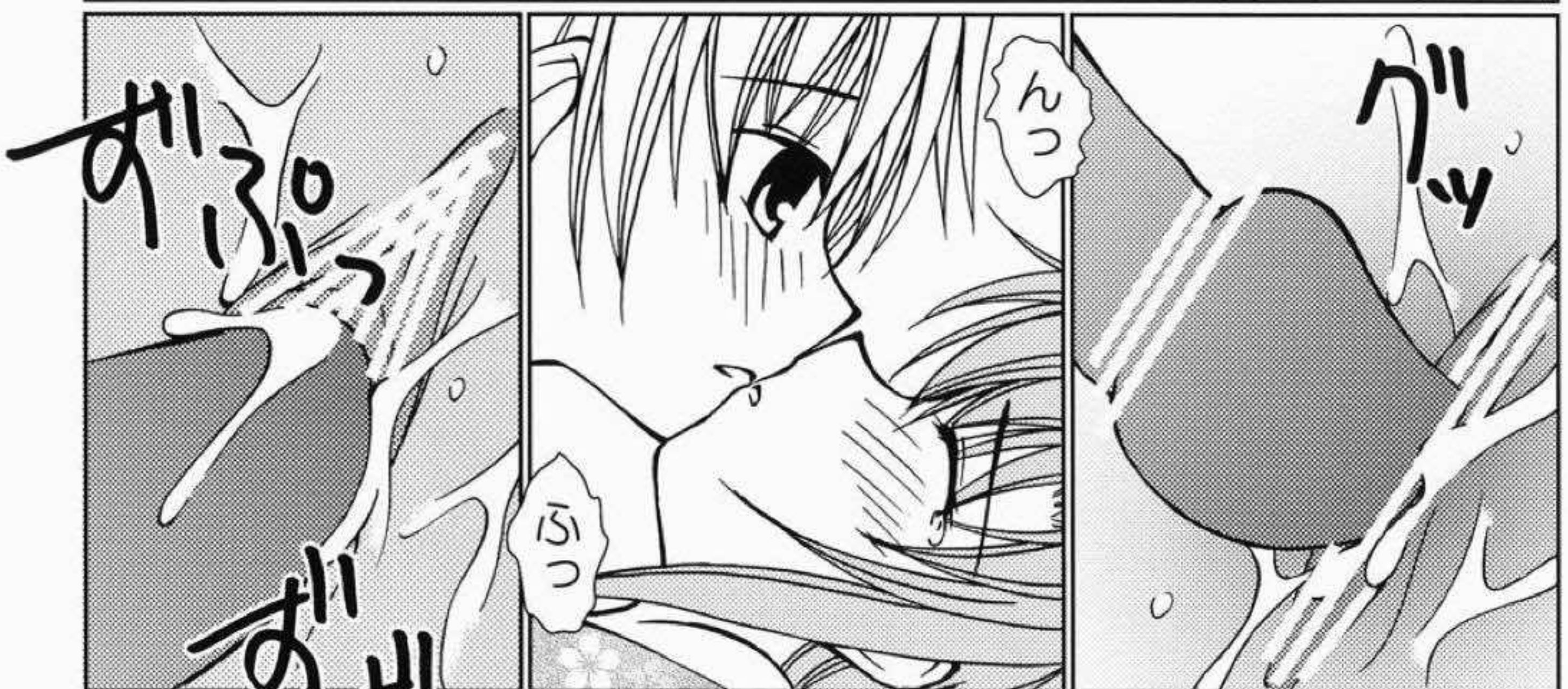
…なんか
ヒナギクさん

はあ

はあ

びりっ





あーあーあー



どうですか
ヒナギクさん

あ...ふ

ちゅっ
ちゅっ

チヨコバナナ
なんかとは
比べ物に
ならないでしょう？

あ...ふ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ



ああっ!!

すごく熱くて
さっきまでとは
比べ物に
ならな...い

ぐんぐん



ハヤテ君の
体温が直接...

ん...っ!!

だめ……え

ぢゅん、ぢゅん
ぢゅん、ぢゅん
ぢゅん

んっ!!

ひああ!!

ぢゅん、ぢゅん
ぢゅん、ぢゅん

さっきまでとは
反応が
違いますね

あふっ!!

んんっ!

でも

あまり
大きい声出すと
見つかったちやい
ますよ

ぢゅん、ぢゅん
ぢゅん、ぢゅん

もう少し声
出さないように
我慢して
くださいね

あゝっ

あゝっ

ぬるる
ぬるる
ぬるる



ぬるる

はあゝ



かか
かか
かか

ぬるる
ぬるる
ぬるる

や...やだっ
声が抑えられな...い

あゝ



トビッ

ぐんぐん

おはっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

おはっ

おはっ

おはっ

おはっ

おはっ

おはっ

おはっ

いきますよ
ヒナギクさんっ!!

おはっ



あーあーあー
やっ、

がっ
あーあー

あーあー

あーあーあー
あーあーあー
あーあーあー
あーあーあー

あーあー

あーあー

あーあーあー

あーあー

あーあー



ゆかた
ですからねえ

えっ!
ちよっ!!



ねえ
ハヤテ君

私まだ
ぱんつ返して
もらってないと
思うんだけど?



これで
最後ですよ



着崩したら
丸見えですから
気をつけて
歩いてください

えっ!?

ぱんつ返して
くれれば
大丈夫なこと
だよな?

風も危ないので
注意して
くださいね

もしかして
本当に
返す気が
ないのっ!?



安心してください
しっかり家まで
フォローしますから

もう……っ



じゃあ
行きましようか

えっ?!

ちよっ……!?

「誘ってるんですか？ ヒナギクさん」

ゆつくりと距離を縮めようと身体を寄せるハヤテと同じだけ後退りしていたヒナギクは、背に伝わる乾いた木の感触にビクツと肩を震わせた。

「誰も誘ってなんか……」

気丈に振る舞おうとするものの、意図せず声が震える。

背後には壊れかけた木製の引き戸。身体の左右には彼女を閉じ込めるハヤテの両腕。退路は完全に塞がれている。

「そうですか？ わざわざ僕をこんな人気のない場所に連れ出して置いて。僕はつきりあの人ゴミの中でヒナギクさんが発情してしまっただんじやないかと思いましたが。もしかして痴漢でもされました？ 許せないなあ。僕がいるのに」

「やだっ、そんなわけないでしょう!? もう、いいかげんにどいてったら！」

ヒナギクがハヤテの執事服の胸を押すが、細い見かけにもかかわらずともしない。彼女の抵抗など全く意に介した様子のないハヤテは薄い笑みさえ浮かべてヒナギクの首筋に顔を埋めた。

「——っ」

チリツとした軽い痛みがヒナギクの肌を襲う。次いで肌の上をねっとりとした這い回る濡れた感触に彼女の皮膚に甘い痺れが走った。

「あっ、だめっ、ハヤテくん！」

言葉で拒むと、きつちりと着こまれていた彼女の衣の胸元が

ぐっと開かれた。

吐息で笑ったハヤテが乳白色の肌に唇を押し付けたまま挿入する。

「浴衣つけてっこうエッチですよ。ほら、うなじとか、ちらっと見える素肌とか。帯でしっかりガードされてるからよけいに、乱してみたくありません」

「やだ、そのために浴衣で来たわけじゃな……」

紅潮した顔でハヤテを見つめるヒナギクを、突如空に咲いた光の花が照らした。そして一瞬遅れてドオンという大音量が響き渡る。

「あ、花火始まったみたいですね」

ヒナギクの耳元で囁いたものの、ハヤテはいつこうに彼女から離れる素振りを見せない。

それどころか、彼女の肌の感触を味わいながら帯の結び目をまさぐっている。

貼り付いたような笑顔は崩れることなく、彼女はこれが性質の悪い遊びであることを悟ったが、気づいたところでどうにもならない。腕力でねじ伏せられてしまえばそれまでだし、意外と弁の立つ彼相手に口先だけで勝てると思えなかった。

それでも一応、自分から望んだわけではないという立場を作るために、無駄な足掻きを試してみる。

「ちよっと、いったい何のためにここまで来たのよ!?」

「ヒナギクさんが僕に襲って欲しかったからでしょう？」

「なっ！ は、花火を見るためでしょうがっ！」
躊躇うことなく言い切った同級生に、ヒナギクのほうがかうろたえてしまう。加えて、腰回りの締め付けがなくなっていることに気づき、狼狽を通り越して愕然とした。

どうしてこんなに手慣れているのかと、思わずそちらに意識

が向いてしまい、ムツとする。自分が襲われても拒むくせに、他の女の子の相手をしているのかと思えば気に入らないのだ。

いつの間にか緩んでいた帯が衣ずれの音を立てながら床板の上に放り出される。

そして、再び空が五色に染まり、遠くで歓声が沸き起こった。

しかし、彼らの周りに人の気配はない。見えるのは古びた鳥居と鬱蒼と茂った森。そして二人が身を寄せ合っている崩れかけた社だけだ。

「せっかく穴場を見つけたから、ハヤテくんと一緒に見られたらいいなって思ってたのに」

悔しいのと悲しいのと恥ずかしいのがごちゃごちゃに混ざりあった感情を持て余して、ヒナギクはハヤテから視線を逸らした。

彼がこの笑顔を他の女の子に向けていたかもしれないと思うと、胸がチリチリ痛んで、うまく笑えなくなる。口を開けばかわいくないことばかり言ってしまうようで、彼女はきゅつと唇を引き結んだ。

目を伏せたヒナギクの脛に柔らかな熱が触れる。

「わかってますよ。でも僕は花火よりも、浴衣姿のかわいらしいヒナギクさんのほうを愛でたいです」

ヒナギクの心情に気づいているのかは定かではないが、ハヤテが甘い言葉を彼女の耳に吹き込んだ。

するとヒナギクの睫がピクリと震えて、大人しくなる。

抵抗の意思がないことを確認すると、ハヤテは内心苦笑した。実はヒナギクの苦悩など、おおよそ予想はついている。

恋愛偏差値のさほど高くないハヤテではあるが、限りなくゼロに近いヒナギクに比べれば、あくまで常識的な範囲内にあるのだ。

苦笑。本当に苦笑しかありえない。

彼女は自分に向けられる彼の笑顔が、他の人に向けられるものと同じだと思っているようなのだ。

彼女を見つめる眼差しに甘さが溶け込んでいるのを、きつと彼女だけが気付いていない。

それは……まあ、ハヤテの悪戯が彼女の目を曇らせてしまっているのかもしれないが。

彼はいつも悪戯を装って彼女に触れるから、恋愛初心者のヒナギクには難しすぎるのだろう。

ハヤテがそのような触れ方をするのは、未熟なヒナギクに負担を与えないためなのだが、当然彼女の理解が追いつくはずもなく、余計に混乱させているようだった。

どうしたものか、とハヤテは苦笑を繰り返す。

もう少しだけ、待ってあげることにはしようか？

ハヤテは顔をずらすと、ヒナギクの唇に『悪戯』を仕掛けた。「んっ、……んんーっ！」

ぎこちないキスで応えるヒナギクがかわいらしくて、熱い頬にも唇を落とすと彼女を見下ろした。

彼の陰になって表情が見えにくくなっていくが、それでもトロンとした瞳と上気した頬、物欲しげに薄く開かれた唇が目に入る。

ハヤテが見つめていると、自分の状態に気づいたらしいヒナギクが恥ずかしそうに視線を逸らした。

彼はそんな彼女の様子に優しい苦笑を洩らす。

とつくに処女ではなくなっているはずなのに、こういったお子様なキスにさえいまだに慣れないらしく、いちいちうぶな反応を返してくれる。まあ、そこがかわいらしいと言えはその通りだし、初々しい反応を何度も堪能できるのは、彼としてもお

いいところだから、今はまだ、あえて先を急いだりはしない。気が強いくせにすぐに真っ赤になるところとか、負けず嫌いなところとか、彼女の性格すべてがハヤテにはかわいらしく思えてならない。

一応、大切にしたいとは思っているのだ。

可能な限りこの腕で守って、いつくしんで、優しくしたい、と。

ヒナギクへの悪戯は彼女に猶予を与えるため。ハヤテが『悪戯』するのがいけないのであって、彼女はただ巻き込まれていくだけ。そういう逃げ道を与えることで、オクテなヒナギクのココロを見守っているのだ。

とはいえ、百パーセントそうかと問われれば、否定するしかない。

好きな女の子について意地悪してしまうのは、もはや男の性なのだからしかたがないだろう。

ハヤテは横を向いたヒナギクの耳に舌を差し入れると、思わず甘い吐息を漏らしたヒナギクを床に押し倒した。

簪がするりと抜け、長い髪が散らばる。

反射的な弱い抵抗が、さらにハヤテの悪戯心を煽っていく。

「夏祭りに浴衣で来て下さったのは僕のため、でしょう？」

頬を染めたヒナギクが視線を逸らして瞳を潤ませる。こういう反応が男を誘うのだと、本当に彼女は自覚していないのだろうか？

「……ばか」

返す声に覇気はなく、そこに見え隠れするのは、戸惑いと羞恥と甘え。無敵の生徒会長も、今はただの少女にしか見えなかった。

「ありがとうございます。よくお似合いですよ」

彼はわざと少し低めた声で囁くと、彼女の艶のある唇を吸った。そして、戸惑う舌を捉え、さらに奥まで蹂躞する。溢れた二人分の唾液が彼女の顎に筋を残しても解放することなく、呼吸さえも奪っていった。

「……んっ、……んうーっ！」

ヒナギクの目尻に滴が光る。しかたなくわずかに身体を離れたハヤテの舌先から銀糸が伝い、それがいやらしくヒナギクとハヤテを繋いでいた。

彼はもう一度、軽く唇を合わせた。チュツと小さなリップ音がヒナギクの熱い吐息に紛れる。

「あれ？ 感じちゃいました？ そんな蕩けそうな瞳をして……。いいですよ、ヒナギクさんのご期待通りに」

悪戯を——。と心の中で呟いて、ハヤテはついでに口吻を繰り返す。

空に響き咲く轟音の花。間近に聞こえる衣ずれの音。

ハヤテが少女の肌を弄るにつれてただの布の塊となっていく薄衣は、今やヒナギクの両肩に頼りなく引っかかっているだけとなっている。

「やだ、ハヤテくん、恥ずかしい……」

「そうでしょうね。無人とはいえ神社の境内で、こんなに露わに肌を曝して。ヒナギクさんは本当にエッチな人だ」

「やっ——」

ヒナギクの全身が蔷薇色に染まる。理知的な彼女には、羞恥が何よりも効くらしい。

彼はひそかにほくそ笑むと、必死に胸元の布を掻き合わせようとするとヒナギクの腕を捕らえて、彼女の頭上に押しつけた。

「好きなんでしょう？ こうして恥ずかしい場所で、無理やり身体を自由を奪われて犯されるのが。表では人の上に立ってい



でも、心の奥底では支配されたいと願っている。違いますか？」
「ちが……う」

誰からも尊敬されているはずの少女は、しかし瞳を潤ませて蚊の鳴くような小さな声で否定する。吐息は熱く乱れて、押さえつけられている腕は抵抗しようとしていない。これでは彼の言葉を肯定しているも同然だった。

いつになったら自覚してくれるのか、と数え切れないほど繰り返してきた呟きを心の中で繰り返す。

ハヤテは溜息を吐くとヒナギクの首筋を強く吸った。目立つ箇所には鮮やかな華が咲く。耳のすぐ下のその場所は、浴衣を着直したとしても隠れはしない。つまりは清廉なはずの彼女が淫らな行為に及んだ証を周りの人間に曝して歩くというわけだ。

羞恥に震える彼女を想像して、ハヤテの心はわずかに満たされる。

「いいですよ、僕のせいにしてしまっても。ヒナギクさんが花火を見れないのもエッチな行為に溺れるのも、すべて僕が悪いんです。これで満足でしょうか？」

改めて口にしたところで、今はまだ何も状況が変わると思えないところが悲しい。

甘い囁きを残し、彼はツンと尖った胸の先端に軽く歯を立てた。

「あうっ」

突然の痛みに驚いたうぶな身体を宥めるように、今度は優しく舌で舐め回す。行為を繰り返すうちにヒナギクの腰が小刻みに振られ、堪え切れない嬌声が固く引き結ばれた口元から零れ落ちる。

勃起した乳首を執拗に責めながらハヤテの手はヒナギクの肌を下に滑り、途中で彼は眉をしかめた。

「感心しませんね。和服のときにはパンツを穿くべきではないでしょう？」

特に浴衣は下着のラインが出やすいというのに、と普通の（と、自分自身では思っている）男子高校生であるはずの彼がぶつぶつ文句を言っている。譲歩して和服専用の下着だ、と文句は続く。

変なところにこだわりがあるハヤテである。

「そんなんっ、パンツくらいみんな穿いてるわよ!？」

思いがけないツツコミに呼び戻されてしまった彼女の理性が、自分の置かれている状況を改めて理解して、さらなる羞恥をつのらせた。触れなくてもわかるくらい、彼女の身体は火照っている。

「と、いうことで、このパンツは僕がいただいておりますね」
鈍感な彼女へのせめてもの意趣返しとして、ハヤテはかわいらしいレースの付いた女性用の下着を執事服のポケットの中に大事にしまった。

「えっ! うそっ!?! どうしてそうなるのよっ!?!」

「必要ないものだから……:……:というのには建て前で、単に僕がヒナギクさんのパンツが欲しいからです」

「はあっ!?! わけわかんないんだけど!?!」
轟音を伴って光の花が夜空に咲く。

毎年話題になるくらいの見事な大玉だったが、今の彼女にそれを愛でるだけの余裕はない。

あられもない姿を恥じらうべきなのか、意味不明な行動に突っ込むべきなのか、頭の中がごちゃごちゃで、本当にもうわけがわからなかった。

幸か不幸か、さっきまでの甘い雰囲気はキレイさっぱりどこかへ飛んで行って微塵も残っていない。

恋人同士っぽい空気に不慣れなヒナギクは、ちよっぴり残念に思いながらも、正直ホツとしていた。

こういうとき、意地っ張りなヒナギクはハヤテの前でどんな顔をすればいいのかわからないのだ。

空気が軽くなったところでヒナギクは脱出を試みる。こうなったら、ハヤテもヤル気を失っただろうと踏んだのだが、予想と裏腹にハヤテの拘束は全く緩む気配を見せない。それどころか、ヒナギクの腕を押さええていないほうの手で、彼女の秘部を躊躇いなく愛撫し始めた。濡れた音がかすかに聞こえ、彼の指は簡単に身体の奥へと導かれる。

「やつ、あつ、だめ……えっ！」

一瞬にして熱を呼び戻されたヒナギクの身体が、狂ったように刺激を求める。

どんなに自制していたとしても、一度禁断の果実に触れてしまえば、本能的な欲求から逃れることはできない。ことに快樂を知ったばかりの若い身体は、意識とは関係なく、際限なく欲望に溺れてしまうのだ。

彼女のために悪戯に徹することにしたハヤテは、わざとらしく口元にニヤリとした笑みを浮かべてみせた。

「なんだ、もう準備万端なんですね。すみません、お待たせして」

彼は素早く自らの性器を取り出すと、滾る先端をヒナギクの濡れた花口に押しつけた。

けれど、そのまま押し入ることはせずに、入るか入らないかくらいの微妙な力加減で彼女の入口を刺激する。

何度も突いているうちに彼女の秘部全体が愛液で潤い、肌同士の間が抵抗がなくなっていく。

「どうしたんですか、ヒナギクさん？　もうヌルヌルじゃない

ですか。これじゃあうっかり入ってしまいますよ？」

からかえば、ヒナギクの秘肉がヒクヒクツツと反応を返した。

身体はハヤテの熱を求めている。けれど感情が追いついていないのだろう。快樂に落ちついていく身体とは対照的に、淫らな自分を認められない彼女の戸惑いがハヤテには手に取るようになった。

しかたないな、と苦笑をもうひとつ。

彼女に対して甘い自分を自覚しつつ、彼は今日もまたヒナギクに免罪符をプレゼントする。

ハヤテは、大きく広げて持ち上げた彼女の太腿にキスを落とすと、濡れた入口で戯れていた切っ先を、熟れた秘部の奥深くに埋め込んだ。

「あ——っ！」

待ち焦がれていた質量に、ヒナギクの身体が歓喜に震える。

しかし、貪欲なソコは熱を受け入れただけでは満足せずに、さらなる刺激を求めて自らハヤテのモノに喰らいついた。

「やつ、なんでっ!?　違っ……私！」

言葉では否定しつつも、彼女の腕はハヤテの肩を抱き寄せ、さらに深い繋がりを求めている。快樂で腰が揺れるのは生理現象だが、清廉すぎるヒナギクはそんな自分自身が認められないのだ。

身体の変化に怯えるヒナギクを宥めるために、ハヤテは激しく腰を揺すり始めた。

強く腰を打ちつけられ揺さぶられるにつれて、彼女の頭は白く霧がかり、余計なことなど考えられなくなっていく。あとは、本能に忠実な若い身体が残るだけ。

「いいんですよ。今は何も考えなくて。ヒナギクさんは僕に無理やり犯されてるだけですから、どこもおかしくなんてありません

せん」

挿入の合間に囁けば、ヒナギクの身体から少しだけ力が抜けた。

「すべて僕のせいにしてしまえばいい」

彼はヒナギクの腰を高く持ち上げて、上から体重とともに力強く楔を打ち込んだ。

肌がぶつかると音が響き、衝撃で彼女の中から蜜が零れる。

「あつ！ ひあつ、やああつ……！」

抑えきれない甘い嬌声が、ハヤテの熱をさらに昂らせる。

禁欲的に彼女の肢体を隠していた浴衣は、一度はだけてしまえば洋服よりも露わに肌の白さを曝した。

夏の熱気で汗ばんだ肌が、しっとりとしてハヤテの手に吸いついてくる。

「今日のヒナギクさんはいつもよりもずっと色っぽいですね」

彼女に笑いかければ甘い罵りが返ってきた。

それを彼は笑顔で受け流す。

けれど、笑みを保つ余裕がなくなってきたのは、少しずつ荒くなる注挿に如実に表れていた。

ヒナギクの熱い隧道の中で彼の欲望は膨張し、先端を女性器の最奥に押しつけるたびに、そこから痛いくらいの痺れが腰に伝わる。

がむしやらに締め付けるだけの技術も何もない稚拙な彼女の行為がかえってハヤテを追い込んでいく。初々しい反応は彼に幼い少女を犯しているような錯覚さえ起こさせる。意識すれば、滾った性器がどくんと脈打った。

彼は貼り付けた笑みを消すと、ヒナギクの脚に一瞬唇を落とす。性急に少女の狭い膣を押し広げ、貪り始めた。

敏感な内臓が急激に擦られて、ヒナギクが悲鳴を上げる。

けれど、ハヤテに彼女を気遣う余裕などない。一度走り出してしまえば、解放の瞬間まで止まることなどあり得ない。本能に組み込まれたプログラム。若い身体はただ本能が命じるままに快樂の奔流に服従するしかないのだ。

「ヒナギクさん、好きですよ」

荒い呼吸の合間に囁いた言葉は、意識を朦朧とさせているヒナギクには届かない。

それきりハヤテは口を閉ざし、ひたすらにヒナギクの蜜をあおった。

ただ激しく暴かれるままに身体を弄ばれているヒナギクは、ひたすら蕩けそうな啼き声を上げ続ける。

羞恥心を失った彼女の痴態は、淫らで艶やかだった。

ハヤテの心拍数が跳ね上がり、下半身の限界を訴える。

彼は暴走する身体に逆らえず、乱暴に彼女の最奥を犯し続けた。

大量の蜜で汚れたヒナギクの媚肉がピクピク痙攣して、ハヤテの解放を促す。

空には閃光とともに轟音が鳴り響いていたが、もはや彼らには聞こえていない。とうに互いの乱れた息遣いだけが聴覚すべてを支配していた。

嬌声の合間に、無意識に紡がれる『ハヤテ』の名。

ヒナギクの声に引張られるようにハヤテの欲望が強引に引き出されていく。

彼の喉から苦悶の喘ぎが零れる。

ヒナギクのナカから伝わる熱が、いつしかハヤテの全身に回り、感情も何もかもを甘く溶かす。

どくんと、彼の中心が大きく脈打った。

彼は膨れ上がった欲望をヒナギクのいちばん深いところに押



しつけると、誰にも触れられない彼女の中心に熱い精を大量にほとばしらせた。

「これでいいですよ」

恥ずかしげに佇む少女の全身をくまなくチェックすると、ハヤテは満足げに頷いた。

「あ……ありがとう」

完璧な浴衣姿となったヒナギクは、所在無げに視線を彷徨わせた。

うまく力が入らなかったヒナギクの代わりに、ハヤテが手際よい着付けを披露したところだ。

聞けば、着付けに関してはアルバイトの経験があるのだという。

女の子の浴衣の取り扱いに慣れていた理由を誤解して勝手に落ち込んでいたヒナギクは、今度は恥ずかしさでいたたまれなくなる。

自分だけを見てほしい、なんて、独占欲が強いにもほどがあるだろう。……などと考えてしまうあたり、彼女が自覚するのはまだ先のようにだ。

ヒナギクの様子を窺っていたハヤテにも、それは伝わっている。

たしかにもどかしいが、それは仕方がないと彼は思うことにしている。鈍感な少女を好きになってしまった自分の業だ。もとより彼は長期戦を覚悟していた。

けれど、できることならば……。

「なんですか？ ヒナギクさん」

彼は自分の名を呼び続ける可憐な少女につこり笑いかけた。恥じらう姿は、やはり彼の嗜虐心を刺激する。

彼女は頬を真っ赤に染めて唇を震わせていた。

そんな姿を見れば、彼の我慢も少しは報われるようだった。

「なに、じゃないでしょう！ はやく、パ……パンツ返してよっ！」

羞恥に打ち震えるヒナギクに対し、ハヤテはわざとかわいらしく小首を傾げてみせた。

「なに言ってるんですか、ヒナギクさん。あれは僕がいただいたでしょう？」

「なっ！ あ、あげてないからっ！」

うろたえながら憤慨する彼女がかわいらしくて、ハヤテはニコニコしながらその光景を見つめていた。

「ちよっと、聞いてる!？」

「聞いてません」

「聞こえてるでしょうがっ！」

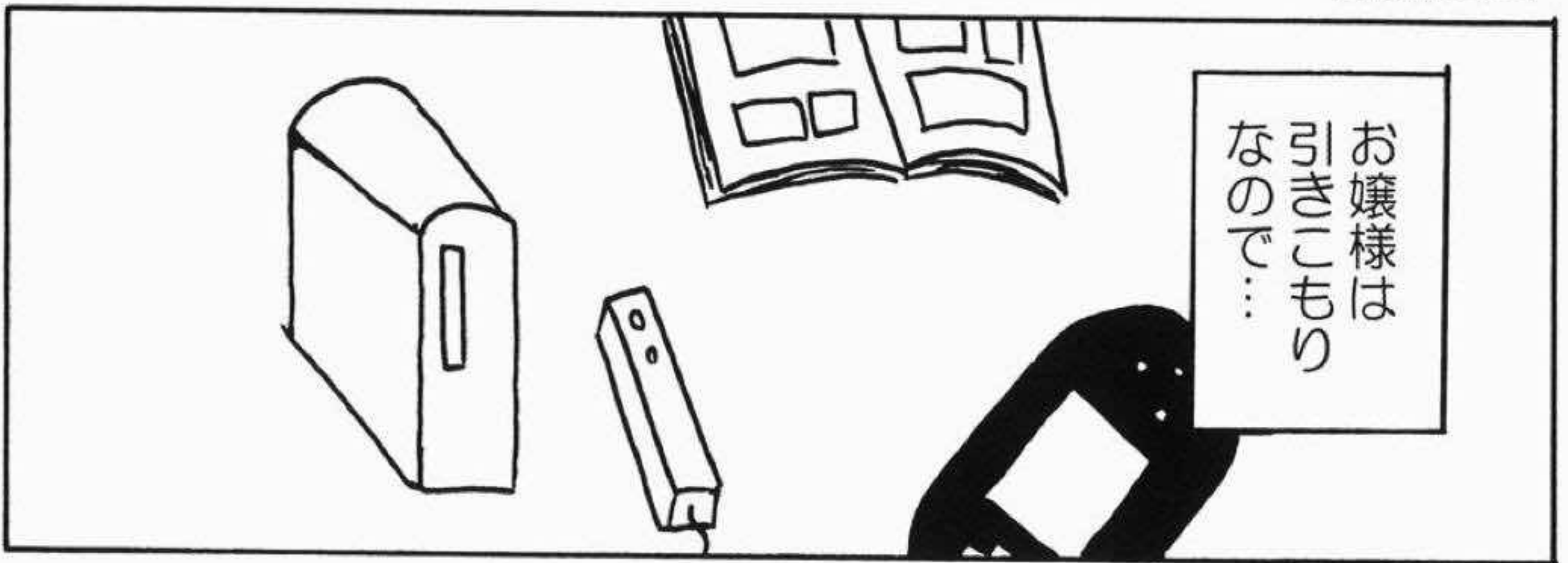
ヒナギクがかわいらしく吠えるのを、彼は笑顔で聞き流した。鈍感な彼女に対しては長期戦を覚悟している。が、できること

とならばもう少し先に進みたいというのが正直な気持ちだ。せめて早く彼女がハヤテの『悪戯』の意味に気づくといい。

けれど、二、三步移動したところでハヤテはいや、と思いつまなかった。

あとしばらくは『悪戯』の関係を続けるのも悪くないか。

ハヤテはポケットに大事にしまわれたヒナギクのパンツに触れると、心底楽しそうに苦笑を洩らした。



◇お疲れ様でした。2月かぞおです。

◇今回、愛知県某所の七夕祭りの写真を確保して背景もしっかり描く予定だったのですが、いつもより突貫作業になって凹んでいます。浴衣の合わせが逆の娘がいるのもワザとですよ！間違いじゃないですよ！！

◇携帯用電子書籍の件ですが、9月17日から配信予定らしいです。おっばいおっきいです。詳しくは下記サイトで。

◇次はヒナか超電磁砲だと思います。どっちにしろ貧乳です。それでは。

ハヤテのごとく！FANBOOK Vol.11

「大丈夫っ！ゆかただから！」

発行日：2009年9月6日

発行：りんご紅茶

URL：<http://www17.ocn.ne.jp/~ringoame/>

メール：futatuki@world.ocn.ne.jp

印刷：大陽出版さま



「大丈夫っ！ゆかただから！」

2009・9・6

りんご紅茶

FOR ADULT

